

動機の文法としてのメディア論

若者言説における「メディア」概念の用法に関する分析

東京大学大学院 小川豊武

1 目的

本報告の目的は、マスメディアにおける日本の「若者」をめぐる言説の中で、繰り返し用いられてきた「メディア」概念の用法を分析することによって、当該言説が報道や批評としての信憑性をどのようにして獲得していたのかを解明することにある。戦後日本において、「若者」と「メディア」を関連づけて若年層や社会について論じる言説のスタイルは、カプセル人間論、新人類論、おたく論、携帯電話による友人関係希薄化論など幾度となく繰り返されてきた。従来の社会的な若者研究はメディア利用に関する質問紙調査などによってこうした言説を科学的に反証することに注力してきた。しかしながら、そのような研究のみでは、科学的には必ずしも妥当とはいえないにも関わらず、こうした若者言説がいかんして信憑性を獲得し、時代を超えて反復され続けているのか、という問いを見逃してしまうことになりかねない。

2 方法

本報告の先行研究としては「若者」と「メディア」を関連づけた言説を知識社会的に考察した小谷編（1993）、石田（1998）などが挙げられる。本報告もこれらの研究と問題関心を共有するものであるが、若者言説をイデオロギーとして批判的に考察するというよりも、まずもってそれらが固有の言説実践としてどのように信憑性を獲得していたのかに照準して分析を試みたい。そうすることによって私たちが「若者」と「メディア」を関連づけた言説を反復してしまう理由の一端を解明できると思われる。本報告ではこうした目的を達成するために、エスノメソドロジー研究のアプローチ（酒井ほか 2009 など）を参考に、若者言説における「メディア」を含めた諸概念の用法の分析を通して、当該言説がいかんしてもっともらしい報道や批評として理解可能になっていたのかを明らかにしていく。

3 結果

現時点の分析結果としては、第一に「若者」と「メディア」を関連づけた言説においては、“メディアの内容”ではなく“メディア自体”が人々の意識やコミュニケーションの在り方に変化を与えているとするマクルーハンのメディア論的思考法が用いられていたという点が挙げられる。第二にそうした言説においては、対面状況を主としたコミュニケーション規範が活動の資源として用いられていたという点が挙げられる。このような専門的知識と常識的知識の使用によって、新しい「メディア」を利用している「若者」たちの「奇妙な」ふるまいを外部から観察し、そこで行われているコミュニケーション内容の多様性は捨象した上で、彼・彼女らの内面を推論して批判することが可能になっていたのである。

4. 結論

「若者」と「メディア」を関連づけた言説の信憑性は、各時代の社会状況とも密接に関わっていると思われる。しかしながら、新しい「メディア」を用いて多様なコミュニケーションを行っている若年層の内面を縮減的に把握して、報道・批評といった活動の資源にできる、メディア論的思考法の実践的合理性も決して見過ごすことはできない。度重なる実証研究による批判を受けてもなお、私たちが「若者」と「メディア」を関連づけた言説を反復してしまう理由も、おそらくここにあるのではないかと。

文献

石田佐恵子, 1998, 『有名性という文化装置』勁草書房.

小谷敏編, 1993, 『若者論を読む』世界思想社.

酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2009, 『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版.